

會



報

1953年1月

165

日本山岳會

秩父宮殿下を悼み奉る

楨 有 恒

秩父宮殿下が去る一月四日早曉鶴沼の御別邸で御逝去あらせられましたことは、突然の悲しみでありまして哀悼し奉るの情、極めて切なるものがあります。多年の御療養生活も最近順調に進まれ御輕快と承っていたのでありましたがこの度の御急變に私達はい知れぬ寂しさに沈むものであります。

殿下がスポーツの宮様として國民の敬愛をお集めになつた御生涯は、まことに偉大な御足跡を残されたものと申上げなければなりません。殊に優れた登山者としてわが國登山界に與えられた影響は深く且つ巨きものであるのみならず、世界の高い尊敬を受けられておつたのであります。

殿下がはじめて山岳に行かれたのは大正十年の暮、赤倉の細川邸に泊られてスキーをもつて妙高山麓に遊ばれたときであります。それ以來、冬の間は土曜日の夜行列車で赤倉又は五色方面に向われ、日曜終日を登山スキーに送られ、月曜の朝はもう軍務に服しておられるといった風の強行を幾度か繰り返えされたものであります。健康に充ち溢れた勇敢なる青年宮様は、狭いス

キー練習場で器用な技を求めるといふようなことは決してありませんでした。相當の荷を背負つて何時間も山に登り、歸途は直滑降に雪煙りを上げて深雪に轉び没するというのが何時ものことであります。

その後、夏には日本アルプスに御登山を始められ、最初のは中房から燕を経て槍ヶ岳への行程でありました。また五月の立山に登られて積雪期の壯觀をお楽しみになつたこともあります。

大正十四年夏にはスコットランドのベネヴィスに御登山になり、同年の冬はアルプスにおいてアレッチ氷河からグリムゼル峠へのスキーの山旅をなされました。翌年の夏にはベルナーオーパーランド及びヴァリスの巨峯を十餘り御登攀になられたのであります。御歸朝の後には穂高、槍、小槍などの御登山を最後として激しい御登山の機會はなかつたようであります。

殿下の登山に對する御熱情は、或は吹雪の中に、或は激しい岩登りに、或はまた月明に澄む氷河の上に、そして麗らかな山頂に、それからまた美しいお花畑や静かな森にと限りなく求めさまよい愉しまれるのであります。そしてそれは何時も自らのお力によつて克ち得られた喜びでありまして、山岳の裡に一人の登山者としての嚴しい修練を積まれたのであります。

御殿場の御別邸より明け暮れ仰がれ

る富士の美しさをお話になりました御心境なども今更のように慕わしく拝察されるのであります。

名譽會員 秩父宮殿下

本會名譽會員秩父宮雍仁親王殿下には神奈川縣鶴沼の御別邸において療養生活をなされていたが、昨年十二月上旬風邪をひかれたのがもとでコレステリン性肋膜炎にかゝられ、膈炎を併發、一月四日午前四時三十分逝去された。

御齡五十歳。殿下はつとに日本アルプスをはじめスイスアルプスの高峰に多くの足跡を印せられ、またスキーにも堪能であられたことは、本會員にとつて今更説明を要さないが殿下はまた本會發展のためにも多年に亘つて少なからぬ配慮をなされたのであつた。一九五〇年四月本會は殿下を名譽會員に推薦上げ、殿下もそれを快諾された。

殿下はまた一九二七年嚴選をもつてきこえる英國アルバイン・クラブの名譽會員に列せられた。本會は殿下の御逝去に對し衷心哀悼の意を表するものである。

尚殿下の御葬儀は體協を中心とするスポーツ關係者が多く御奉仕申上げたのだが、登山は特に殿下が愛好された部門でもあつたため榎會長以下役員的大部分が御逝去以後十二日豊島岡に於ける御葬儀迄御奉仕申上げ、また本會から花環一對を御靈前にお供えした。

山下と山



松方三郎

秩父宮とスポーツとは切っても切り離すことが出来ない関係にあつた。

殿下がスポーツを熱愛された理由は幾つかあつたと思うが、スポーツの世界には殿下であるとか平民であるとかいつた區別が一切存在しない。それは絶対平等の社會であるということが殿下の打込まれた大きな理由ではなかつたらうか、と僕は思う。そしてその意味で殿下はまことに男らしい方であつたと思うのである。

人はだれでも生れながらにして何等かの束縛を背負つてゐる。肉親の關係もそうだし、地位や身分の有ること無いこといづれもそうだし、そして人の一生はそうした束縛を超越するか、それと調和するか、あるいはそれをたゞきつづけて自由になるか、何時もこうした問題と取組んでゐるものだが、殿下の如きは、その意味ではわれわれの想像も及ばないような複雑な關係の中で生涯を過ごされたのだと思う。そしてその中でスポーツ

の世界だけはこうした問題をすつきりと割切つてゐるという意味で、殿下はこゝに一つの解放された自由の天地を見出しておられたのだと思う。

もつとも殿下が御自身でその中に飛込んで楽しまれたスポーツとなると、それは決して多くはない。ある時代にはテニスを樂しまれ、他の時代にはボートを大いにやられた。スクワツシに打込まれた時代もある。しかし、終始一貫して熱中され、また、ある程度までその道で独自の境地を拓かれたのはやはり山であつたであらう。その意味で山は殿下の御生涯の中で獨特の地位をしめてゐる。

いうまでもないことだが山は殿下だからといつて特別の待遇をしない。もちろん殿下のことだから、先生もいゝし、注意も一般の場合の何倍か拂われることだろう。しかし、それでも、リニツクサツクは殿下も御自身で背負われなければならぬし、悪場にかゝれば、殿下も手足がのびきつて、進退に窮されることもあるわけだ。雪に打たれ風にさらされることもわれわれと同じことだし、時に辛い目もされるし、危い目にもあわれるところだ。山が殿下を大きく引つけたその力は、その山の世々の非人情、一視同仁の空氣によつたと思ふのである。そしてこの意味で、殿下が山を知られたことを、

殿下のために、本當によかつたと思ふのである。

アルプスで登られた當時の殿下は年齢的にも若くあられたし、非常に健康でもあられたから、その山登りも身體を山にぶつけて行くといつたもつぱら行動的なものだった。たま／＼申分のない珍しい天氣続きの夏であつたので、殿下は思ふ存分アルプスの山登りを味ひ、樂しまれた。餘り天氣が続きすぎるので殿下がついにアルプスの本當の恐ろしさを體驗されない



グリンデルワルトにて 細川護立氏撮

のではあるまいか、そしてもしそうだとしたならばそれは一つの大きな損失ではあらうと、そんなことを心配するくらいだった。しかし、今から考えると殿下の御一生のうちで、この一夏はどの點から見ても完全な、陰影の少しもない晴々したものであつたという點で、本當に素晴らしいものであつた。そして五十年の御生涯の中にそうした一夏のあつたことをわれわれは本當にうれしく思うのである。

音羽の御墓所には殿下の御遺骨にそえて御遺品の幾つかを小さな木の箱に入れておさめられたが、その中には、當年の——今から數えると四半世紀も前のことだが——殿下をしのぶ幾つかの寫眞が入つてゐる。その寫眞の一つにリヌヨッホの上に立つておられる殿下とその一行の寫眞があるが、これはその年の御登山の最後を飾つたモンテ・ローザからリスカムまでの大縱走の時の記念のものだ。その寫眞に出てゐるアマッテルも、シトイリーも今では故人になつたが「アルプスの山登りもあの頃が、全盛だつた」とブラヴァンドやエミールがいうそのアルプスの一つの時代を正に象徵するように、そこに列んだフェーラーの顔觸れは堂々たるものだ。アルプスの寫眞はこの他にゴネル・グレッツチャーから見上げた夕暮

のマッターホルンと、エンゲルヘルナーから見たヴェツターホルン連峰との二枚が加えられてゐる。ヴェツターホルンは殿下が登られたアルプスの最初のピークであつたし、マッターホルンは殿下の御秘藏の山であつたからだ。

御殿場の、殿下が客間にしておられた書齋兼用のお部屋にはマッターホルンの銀のリリフがあつたし、多分同じお部屋にウィーラントのマッターホルンの色刷がかかつていた。「デア・アインザー

メ」——孤高——というあのマッターホルンである。アルプスで殿下の登られた山は十指に餘る。高きではモンテ・ローザが一番だし、難しさでは低いとはいへながらやはりエンゲルヘルナーの岩登りが第一だつたろう。しかしわれ／＼の山登りと違つて殿下の場合は最初からマッターホルンに焦點があつて、また不幸にして、殿下のアルプスのシーズン是一年で終つたので殿下の思ひ出のアルプスではマッターホルンが一等高く他を抜いて光り輝いてゐるのである。

マナスルウ登山隊 基金募集について

かねてより會員各位の有形無形の御支援を賜りましたマナスルウ登山隊は先發隊が豊富なる成果を擧げて歸國本隊の出發も愈々近きに迫りました。これに要する經費は約三千萬圓の多額を必要とするものでありますが、これに對して會員より六十萬圓の目標で御支援を賜りたく存じます。

細部の趣意については改めて御通知申上げますが何卒御協力下さるよう豫めお願い致します。

募金委員會

藤井運平、成瀬岩雄、神谷泰、石原憲治、沼倉寛二郎、杉本義信、安彦六郎、角田明、金坂一郎、村井米子、坂倉登喜子、各支部長、松方義三郎(東京)篠田軍治(關西)藤島玄(越後)伊藤彌十郎(福島)高山忠四郎(信濃)中田勇吉(富山)池田知幸(石川)大澤伊三郎(山梨)織田(山陰)山崎春雄(北海道)後藤幹次(山形)大室貞一郎(静岡)橋本三八、跡部昌三



マナスルウ踏査隊通信

今西 錦司

★アンナブルナ第四峰の試登

豫定なら十月十七日は全員がC3に集結するはずだったが、われわれは残念ながら今日BCに集結せざるを得なくなつた。ポストモンスーンといひながら悪天候に見まわれ退却を餘儀なくされたのである。

十月七日 C1' (中間キャンプと命名したもの) 設置。

八日 高木はさらに前進、ティルマンのスパシアル・キャンプ (以下SCCと略) を四八〇〇米に設置。田口、林とシェルバ二名はC1に前進。このティルマンのSCCというのは事實上のアドバンス・BCであるが、ティルマンのAJに書いた記録では、はつきり出ていない。われわれは簡単にBCとC1とを一日行程と考えていたが、BCとC1の間に実際にはなお二つのキャンプを設置する必要があつた。但しBC—C1の間及びC1'—SCC間はそれぞれ半日行程である。

九日 高木はSCCを出発、C1を設置してきた。田口、林はSCCに到着。

十日 今西、中尾、シェルバ一名はC1'に前進。SCCの速中はC

1ヘトランスポート。

十一日 SCCでは水が切れたので天幕の移動をやる。今西らSCCに到着。全隊員相談の結果第一バ1ティのみをC3に送りあげることに計議を變更。

十二日 田口、高木、林、シェルバ三名はC1に前進、残り全部C1ヘトランスポートのうえSCCに歸る。このSCCとC1との間にティルマンを悩ました七〇呎の水壁があつたのだが、われわれはちよつとした漣 (勿論氷の) を見出したにすぎない。そこは固定綱二本で簡単に越えることができた。

十三日 頂上をめざす攻撃隊はこの日C2まで偵察にゆく筈だったが、雪のコンディションが意外に悪くてティルマンのC2まで到達できず、途中にC2を設置してC1に歸つた。SCCのシェルバ三名はC1ヘトランスポートしてSCCに歸る。

十四日 C1の速中は動かない。中尾とSCCのシェルバ三名がC1へ前進、この日SCCでも新雪が積つた。

十五日 天候は良くない。モンスーンがもう一度やつて来たような状態。われわれはティルマンと同一のコンディションなら頂上を

て明らかである。攻撃隊長田口は總退却の決意をした。そこで全員SCCに下る。

十六日 田口、中尾、シェルバ一名はBCに下り、のこりのシェルバはC1までトランスポート。

十七日 全員BCに下る。十六、十七の兩日も引きつづき天候悪く、四五〇〇米位から上は雪、下は雨である。

われわれがもしアンナブルナ四峰のみをねらつてゐるのなら、BCに下らないでSCCで待機すべきであつたろうが、APVはブレモンスーンとポストモンスーンの状態の比較資料を得るのが一つの目的であり、もう一つの目的はヒマラヤの経験の全然ないものにティルマンの尺度にしたがつた行動をとることによつて、自意識をつくることであつた。

前者に就いていえばティルマンを悩ました水壁は幸いなかつたが、C3に至るAPVの北尾根はティルマンのときより遙かに荒れている。これはポストモンスーンのせいではないであらう。併しわれわれはこの豫想された悪場 (水) にぶつかる所までは登れなかつた。たゞ参考のためにティルマン隊はC3まで——最初のC1の下の水

企て、よいとい

う考えだつた

が、客観情勢は

ティルマンの場

合より悪いこ

と、既に十三日

における攻撃隊

の前進速度がテ

イルマンに及ば

ないことからみ

て明らかである。

攻撃隊長田口は

總退却の決意を

した。そこで全

員SCCに下る。

十六日 田口、

中尾、シェルバ

一名はBCに下

り、のこりのシ

ェルバはC1まで

トランスポート

。

十七日 全員BC

に下る。十六、

十七の兩日も

引きつづき天

候悪く、四五〇

〇米位から上

は雪、下は雨で

ある。

われわれがもし

アンナブルナ四

峰のみをねら

つてゐるのなら

、BCに下らない

でSCCで待機す

べきであつた

ろうが、APVは

ブレモンスーン

とポストモンス

ーンの状態の

比較資料を得

るのが一つの

目的であり、

もう一つの目

的はヒマラヤ

壁をのぞき——殆どキックステツプで登つたということを書きそえておく。要するにポストモンスーンの方が雪のコンディションが悪く、併し結論は避けられないであらう。田口らは雪が堅く、その上を新雪がうすくおつていて、キックではきかずステツプを切らねばならなかつたと云つてゐる。後者についてはどうか。われわれはまだ五千米以上に對するアタリマタイゼーションが出来てゐなかつたといえる。もう少し日数をかければ力がつくと出たかもしれない。併し體力的に英國人に劣るのではないかという氣もある。荷物をまたないへルは、荷物をかついだシェルバを常にリードする位でなければならぬ。個人的意見として僕はもつと體力の旺盛な隊員を必要とするのではないかと思う。この點に關する資料を得るために、われわれはAPVはもう一度やる餘裕はないが、田口が歸國したのも、今度はBCの北側に聳える一八、〇〇〇—二一、〇〇〇呎間のピークのどれかに登つてみるつもりである。高さはいづれもナンダ・コートより低い。しかしこのピークが登れるかどうか、その難易はどうかを試したいのである。

それが終ればBCを撤収してラルキア峠に向う豫定で、うまく行けば今月中にラルキアを越せる可能性なしとしない。

(十月十七日・ティルマンのベイス・キャンプにて)

★六二〇〇米峰の初登頂

十月二十日出発、サヒブ、シェ

ルバ全員、ポーター八名、一週間分の食糧。マルシャンディを渡りムクティナート街道をはずれて牦牛大なパッドランドの下をまき、チヨルという谷にはいる。BCからは見えなかつたがこゝにも村がある。谷をのぼつて二股になる處でキャンプ。ジュニバーの林の中でキャンプファイアが樂しめて快適。

二十一日 森林限界も南面では北面と違ひ二百米は優に高い。森林をぬけて草つきにできればとこる放牧地である。ヒマラヤの土地利用は頗る徹底してゐる。草のある限りどんな急斜面でも家畜の足跡がある。草つきの上はガラガラ石、氷河のツング目にかけて急斜面の大トラバースをやり、五三〇〇米で泊る。前夜のキャンプ地は四二〇〇米だつたから、一氣に一〇〇米登つたこととなる。

二十二日 氷河の末端にステツプを切り上のファイルフェルドに出た。五八〇〇米まで登つてキャンプにした。夜は風が荒れた。最低一五〇。

二十三日 この間のアンナブルナの時とちがつて毎日天気はよくなる一方、とくに午前中は風もななく雲もない。ファイルフェルドは二段になつていてその間にアイスフォールがある。新雪が適當に氷の上をおおいアイゼンがよく利いて、ステツプを切る必要がない。氷河をはなれて雪のないクローアールを通つて尾根に取りつき、そのまゝ頂上。丁度正午、パロメーターは六二〇〇米(二〇、六〇〇呎)であつた。雲のまかぬ中にとキャンプへ下つた。マナスルウ連

山及びアンナブルナはすっかり見えた。とくにAPIは物凄く、あれをフランスがやつたとは信じられぬぐらいである。

二十四日 今日第一キャンプ（森のキャンプ）まで一氣にくだる。相變らず好天気、この谷へはいつて以来午後になつてアンナブルナとIVとの間のコル（五五〇〇米）から雲がいつてこないことはなかつたのに、今日は雲が出てこない。ポストモンズーンの天気はいよいよよかたまつてきたらしい。併しポストモンズーンの缺點の一つは日の短さだ。アンナブルナは北面だから新雪が消えない。午後三時過ぎにはもう陽がかげつてい。併しこゝは南向きだからBCがもうかげつてい。このことはまだ陽が當つてい。ガラガラ石の斜面をゆつくり下つて、第一キャンプではまたキャンプファイアを焚いた。

二十五日 往きとは違つてパツドランドの上をまいた。もう家畜はすっかり山から下へおりてゐるのに、一匹の迷ひ羊が岩の上からわれわれの通るのを見ていた。今日も天気良く、前にアンナブルナ連山を見あきると見て山を下つた。BCに歸つた竹節君は鹿射ちに行つた留守だつた。やがて歸つて来て一五、六頭出たが當らなかつたという。夜は鶏のさしきみと大根おろしでネパール酒をのんだ。

こんどの山はアンナブルナIVよりも低い山もやさしかつたけれど、また確かにアンナブルナの時よりわれわれはアクリマタイゼーションができており、コンディシ

ョンがとゝのつてきたことも事實である。とくに高木や林は調子よく登つていた。

われわれはいま頗る好調子で天気もよく、これでBCを撤収していよいよラルキアを越え、マナスルウに肉迫してゆくのである。併し西面及び西北面に關する決定的な偵察報告を作るため、こゝから二隊編成で出發する。第一隊中尾、林、ディリー、パンジー、サルキ、アンノ。第二隊今西、高木、竹節、ギャルツェン、アンツェリン、ダコ。ラルキア越えは一隊となつて十一月十五日頃サマへ入る豫定である。

（十月二十六日、ティルマンのBCにて）

★マナスルウ西北面のリコニサン

十月二十九日豫定どおりティルマンのBC發。三十一日第一隊はトンジェ、第二隊はトンジェまで三時間行程のチュガディカダカという牧場で第一隊と別れて、こゝからマナスルウ西面の偵察のためナムン・パアンジャンという五五〇〇米ほどある峠（ボカラヘ越す峠）に登る計畫であつた。

この牧場に上る計畫では、どこを見ても急斜面ばかりのヒマラヤ山中に珍らしい森にかこまれた平であつて、後にカルを背負い、その續きにはアンナブルナつゞきの水河をのせた山が見える。またマルシャンディの峡谷のなかなには、マナスルウとPXXIXが見えるといふまことに快適なところであつて、キャンプ地としては今迄の處こが一番気に入つていたのであ

る。往きに通つた時にはまだ牛が澤山放牧されてたけれど、今はもう一頭もない。併し二五〇〇米のこゝまで下りるとBC（三三〇〇米）では既に落葉して木がまだ黄葉している。特にツタがまづかに紅葉してきていた。

われわれ第二隊は翌二日ポーター五人を連れて峠道を登つて行つた。マルシャンディ上流の半砂漠的の山と違つて樹木も草もよく茂つていて、日本の山を歩いているような氣がする。違ふところは流石にヒマラヤらしく石楠類の多いことだ。晝過ぎから天氣がぐずれだしてアラレが降つてきた。ポーターの裝備が悪いから無理はできない。森林限界をこえた岩屋のある處で遂に天幕を張つた。三六〇〇米である。

豫定では第二夜を四六〇〇米位の處で過すはずだったが、この新雪ではどうにもならない。空は晴れたのでカラ身で行ける處まで登つてみようということになつた。しかし九時頃にはもう雲が巻いて、晝過ぎには雪が降りだした。勿論こんな天氣では偵察どころでない。四五五〇米まで登つたが峠の上までまだ一〇〇〇米近くもある。遂にキャンプへ引き返した。夜になるとまた空は晴れて月が美しくかがやいた。

三日 朝早く空の晴れている中に偵察しなければ駄目だということとがわかつたので、今日はキャンプからカールの西端にある一峰に登ることにした。頂上へついた時幸運に一旦雲にしまれてマナスルウが姿を現わしはじめ

た。PXXIXもヒマールチュリも出た。印度の平原は雲海の下にある。約二時間半程偵察に費し、キャンプに歸つて食事をした。それから天幕をたゝんで山を下る。その時はもうあたり一面雲に包まれていた。その夜はもう一度牧場で天幕を張つた。

四日 晝過ぎトンジェに着いた。第一隊は二日に出發、ゾード・コイラに入つたという。リエゾンのデイリーが大部分の荷物とともにのこつていた。

五日 三五人のポーターと二匹のゾーバ（ヤクと牛との合の子）をつれてトンジェを出發。ゾード・コイラの谷はマルシャンディの本流とちがつて行けども行けども濕潤である。木の幹には苔が茂り枝からは長大なサルオガセがたれてゐる。

六日 ゾード・コイラの谷はチベットとの交易ルートに當つてゐるから道々背に鹽をつんだゾーバや羊のキャラバンと何度もすれちがう。マナスルウはまだ見えないが、われわれが三本槍と稱したマナスルウの前衛ピークの裾を通つた。谷の奥には二四、一五〇呎峰が見えた。

七日 いよいよマナスルウが出てきた。A・Jのティルマンの寫真にある西北面だ。主峰とその北にあるピークとの間にコルがありこのコルから上は高度が問題で、技術的には餘り困難はなさそうである。併しこのコルへは下の水河から直接とりつけそうにない。北峰の北にもう一つコルがあつて、このコル迄は十分に登れる可能性がある。併しこのコルからだとは



越後湯澤のゲレンデでスキーリフトの逆走事件というのがお正月に突發して二人のスキーヤーが生命を失ひ十餘名の重輕傷者が出た。

スキーリフトと云つても本當のリフトではない。が形態なぞは問題ではなくその保安度が重大なのである。この湯澤のリフトなるものはもと／＼木材運搬用として認可されたもので、人間を運ぶものとして新潟の陸運局とやらから許可されたものではないという。

人間を運ぶ以上はそれだけ經營者は安全に對する責任を負わなければならぬのに事實はそうでなく、商業主義だけに支配されていたらしい。新潟陸運局は調査の結果その撤去を命じたというのは當然のこと、認可の期限も切れていったというのだから亂暴も甚しいといふべきである。

この一、二年方々のスキー場にリフトが建設されてきたが、これを機會に監督の立場にある陸運局なり縣警察はその保安度の検査を眞剣に行い、インシキな施設は即座に營業停止を命じて改善補強させることを提唱する。(KO)

峰をトラバースしなければならぬ。コルのすぐ上に二箇所悪場が見えるが、通れないという断定はできない。問題はそれよりも北峰越えというインダイレクトなコースにあるだろう。ティルマンはサマ側を見ていない。われわれも今のこのコース以外にとるべき道を知らないが、サマからもつと直接に主峰にとりついている道が見つかることを期待している。けれども見つからないなら、このティルマンの見出したルートが唯一のものとなる。西面は全然駄目だという結論にわれわれは到達しているのだから。とも角ティルマンがA・Jに寄せた文章から推しても、マナスルウは道がなくて登れぬという山ではないのである。われわれはそれを確認した。

そうだ。若しわれわれに十日の餘裕があれば、これに登るのが高所用食糧をAPVのC1及びC2に棄て、しまったこと、ラルキアに雪が来ないうちにサマへ越えねばならないことのため、惜しくも断念せざるを得ない。

中尾隊の偵察によればチエオ・ヒマールも登れそうだという。しかし今年の隊は高木にしても田口を失った以上閣志を欠いているところがあるし、竹節君もやはりマナスルウの偵察を第一にして、これには餘り興味を示してくれないのでどうにもならない。僕はこの一九五二年の踏査隊は偵察の他に土産として少し初登山をしたかつたのだが、やんぬるかな、六二〇〇米のチュルウ一つで歸らねばならないだろう。

明日のラルキア越えはボーター十二人とゾーパー五頭で一舉に越そうという計畫である。

(十一月八日、ラルキア・ラの下にて)

★サマを根據地として

われわれはこゝに一つの悲しい報道を伝えねばならなくなつたことを残念に思う。それは隊のナンバー・ワン高木が傷ついたことだ。

われわれはDコルに到達するの東からすべき西からすべきかを明らかにするため、十一月十四日、高木、竹節、ギャルツェン、サルキの四名からなる偵察隊をマナスルウ水河に派遣した。目的はDコルの偵察にあつたから四日分の食糧をもつて出掛け、この偵察のすんだのち、さらにBコルへ向

うより本格的な偵察隊をくり出す豫定であつた。

われわれがサマのこのベース・キャンプに根城をすえたのは十一月十一日だつたが、その日僕とギャルツェンとは先行して、一ヶ月滞在するBCだから水もあり、焚木もあり、日當りよく、風の當らぬような場所さがしたのだが、思ひよりたの場所がなくて、二つはかりしたのである。しかし二つは今の場所に決定した。二つは湧水もあり、少し狭いが一應條件にはかなつていた。住めば都で今では皆よい所だといつていい。しかしこゝへ来たはじめて、天幕をようやく張り終つた所へ、村のヘッドマンなど二三の顔役がきて、こゝは神聖なゴムバ(ラマ寺)の境内だ、こゝで鶏の首をしめたり、こゝの焚木をとつたりしては困る、別の所へ移つてもらいたいという苦情が出た。

しかしこの苦情は翌日ゴムバへ行つてヘッドラマに贈物——錦のフクサや繻絹——をし、彼の支持を得ることに成功したので問題でなくなつた。ところでもう一つこのキャンプへいつてから聞いたのだが、サマ村はこの夏以来チブスが猖獗しているという。そしてこのヘッドラマ——村の生佛でまた非常な財産家——の家でもチブスに何人かかゝり死んだ者も出た。今もお息子の嫁さんが死にかゝつていて、是非お隣者さんに見てほしいというので、林が診察、注射、投薬などしてやつた。これも亦村一番の勢力家であるヘッドラマをして、われわれをサポートさせるようにした有力な原因であつたに違いない。むしろ贈物よりもこの方が有力だつたかもしれない。なおラマからたのまれて、林は他にも二三人死にかけている病人を見てやつた。こういう關係から林は残念だが山へ行くことを断念しなければならなかつた。これらの病人のその後の経過はみな一命をとりとめて、よい方向に向つてゐる。

十五日の午後五時半であつた。BCに残つていた今西、中尾はキャンプ・ファイアにあたつていた。そのときサルキがたゞ一人、たゞとやらぬ顔をして山から歸つてきた。彼の持つてきた通信(竹節からの)を見ると、その日の一時すぎ、五三〇〇米の地點で高木がヒドゥン・クレバスに落ちた。一時間半かゝつてようやく引

きあげたが顔面に深い裂傷を負つて重態である。すぐ林をよこしてほしいと走り書きしてあつた。そこへ林が往診から歸つてきた。早速救援隊の組織にかゝる。午後七時十分、林、シエルバ三名、ボーター二名はサルキと共にヘッドライトやラテルネをつけてBCを出発。翌日上から降りてくる遭難者と出會つて手當をし、十七日過ぎBCへ歸つてきた。高木の傷は眉間から着眼の上へかけた骨骸に達する裂傷で林は十針縫つた。その他小鼻、右手指などにも傷をうけている。

聞くところによるとクレバスは狭かつて暗く、聲はすれども姿は見えない。一時間半にわたり竹節はロープをさげて涙ぐましい搜索をつづけ、やつとロープの先が高

登山用具の専門店

好日山莊

プライスリスト進呈

東京店 海野治良
中央區銀座西二ノ五 電話京橋(56)3600
大阪店 西岡一雄
北區堂ビル前 協和銀行三階
神戸店 島田眞之助
生田區三宮町一ノ三二ノ一



木の手に觸れ、それによつて救われたのであつて、彼は頭を氷の間にはさまれて身動きできず、しかも足が上になり頭が斜め下になつていたというから、もうすこし遅そかつたら、氣が遠くなつてしまつて、ロープを握ることもできなくなつていたやう。まさに天祐であつた。ザイルをつながなかつたとか、いろいろあるが反省は反

どうするか。われわれのオリジナルプランに従えば山の偵察が一段落とげたのち、學術調査がはじまる筈であつた。しかるにこゝで一つ困つた問題がある。サマ村のチブスは今は幾らか下り坂になりつつあるが、保南者はよりよとしてゐるだろう。われわれは豫防注射をしてゐるが、リエゾン、シニルバ、ポーター達は豫防注射をして

省としてわれわれは彼が助かつたことを喜ぶものである。かくして戦闘艦が動けなくなつたけれども、われわれはなお任務を遂行しなければならぬ。しかし林は高木の看護と手當のためにBCをはなれる譯にゆかぬ。それで戦闘力は弱い。今西、竹節、中尾の三名が出陣することになつた。氷河をルートにするDコルBコル方面はそれ故避けることにして、今度は東尾根の偵察に目標をかえた。この東尾根偵察は明二十一日から一週間の計畫である。

さてそれから

いない。それに衛生観念はまるでない。ここに長くいる間に感染し発病しないともかぎらぬ。そんなつたら彼らだけを棄て、歸る譯に行かないだらう。エクスベディションはまさに座礁してしまふことになるのだ。その上林の手持ちの薬も残りすくなつてきた。途中で發病されても困ることに變りはないが、われわれの第一任務であるマナスルウの偵察さえすれば、この危険地帯を一日も早く去ることが賢明なのでないか。高木の負傷の経過がたとえよくなつても對チブス問題からみて、われわれの退却は残念ながらもはや避けがたいところとなつた。こんどの偵察から歸つたら、ぼくは學術調査をすて、このBCを撤收することと決定した。

(十一月二十日、サマのベースキャンプにて)

★リコニサンスを終る

われわれは十一月二十一日裏の小山へ登つて四五〇米にC1をつくつた。夏なら一面のお花畑で到る所に水が流れてゐるやうなアルプスだが、今は水を得るのに困難で瀧の水を用いた。翌日東尾根の一角に辿りついた。高度五〇〇〇米、こゝではじめてマナスルウの東南面をみたが四〇〇〇米以上落ちこんだ物凄い断崖絶壁で、豫想したところとはいへ、これでは全くお話にならない。なおこゝから見たところ東面からのピーク二九及びヒマアルチュリは絶望である。その日はC1にもどつたが竹節は風邪をひいてへたばり今西は齒

痛になやむ。竹節は翌日C2に登るのを断念してBCへ下る。今西中尾は昨日辿り着いた東尾根の一角にC2を張つた。ヒマラヤは下からみてどんなに平らだらうかと想像したところへ、行つてみるとひどい傾斜で面くらうとは、よく書物にかいてあるところだが、まさにその通りで東尾根も南面はすごく落ちこんでゐる。夜中に雪崩の音をきくといまにもキャンプが足もたら崩れ出すのでないか、といつたやうな氣味悪さを感じる。

われわれは氷河の經驗がとぼしいから、この東尾根に活路を求めてきたのだが、こゝから先しばらくは東尾根は氷をかぶつていないかわりに岩峰がつゞいていて、その岩峰は穂高の北尾根程度で、行けないことはないがトランスポイント・ルートとしては適當でない。そこでもつと東尾根にとりつくダイレクトなルートを偵察するためC2を移動することにした。しかし東尾根のサマ側は北面である。われわれは東尾根の裾をからもうとしたが雪がとて深く、ももまでもぐ。それにヒドゥン・クレバスの危険がある。遂にトラバースを断念して一旦氷河の外に出て、モレーンの上にC2をたてた。

十一月二十六日 いよいよ最後の日である。というのは燃料用アルコールも食料も今日でなくなるのである。僕は前から考えていたクローアルへ向つた。北向きで日が當らないから新雪の深いことを豫想していたが、意外にもこゝは新雪々崩の通路になつていて、

雪崩に洗われるためか雪は堅すぎずくらしいだつた。クランボンを引き上げて登つた。剣の平澤谷ぐらゐの傾斜である。登りつめれば今日中に東尾根の五五〇〇米位のところへ出るれるかも知れない。しかし考えてみるとトレニング不足の身では誤つてスリッパしないにもかぎらない。斜面が急になり時間がおそくならないうちに引きかえすこととした。

それからメイン・グレイシアールのよく見える、氷河の中へ岬のやうに突出した低い岩尾根を求めて、氷河を横断して行つた。そこからは先日の遭難地點もよくわかつた。さらに参考になつたことは、DコルからBコルまでのルートであつて、これは頂上附近のテイルマンのいわゆるプラトーンが横から見ると、相當な急傾斜であることがわかるのと同じやうに、ここから見るとなかなかの急斜面で、しかもアイスフォールの間を抜けてゆかねばならないことが判つた。

そこでランチを食つて、われわれはC2へ歸り、これで一九五二年の偵察隊の行動にペリオドを打つたのであるが、考えてみるとアクシデントがあつたとは云へ、全く實力の不足を痛感せざるを得ない。これではまだマナスルウという巨大な八〇〇〇米級の山の裾をまわつたに過ぎない。せめてBコルから東尾根の肩までは行きたいと思つてゐたが五千二、三百迄まで登つたにすぎた。あとにまだ三〇〇〇米近くあるのだ。われわれはキャンプを三乃至四張つて六千から七千のピークになら、技術的

てはじめてアンナブルナIに登つたエルツォーグは、英雄であることを知った。BCでパイプをくゆらしてやるようなライダーは、八千米の登攀に必要なものとは思ふになつた。ライダーは文字通り先頭に立つて道を切りひらいてゆくものでなければならぬ。それだけの体力あり、しかも深謀遠慮進退を瞬時に決しうだけの年功い。來年の成否はまさに來年のライダー如何にかゝつてゐる。諸君は、僕があまり観念的であるというかも知れない。あるいはまた、ぼくのいうところに該當するよう

な人間なら、日本にいくらでもいるといつかもしれない。たしかにヒマラヤと心中しようというのなら、いとやさしいことなのだ。しかし死なずにヒマラヤの八千米に登ろうとすることが、いかに人間業として困難なことであるかを、知つてほしいのだ。こんな計畫を、軽々しく引き上げるわけにはゆかないということを知つてほしいのである。

さて、われわれはとにかく出来るだけのことをして今日午後BCに引きあげてきた。BCでは幸い高木の負傷は悪化せず、とにかく決定どおり一日も早くサマを引き

あげようと、われわれを待つていた。そこで、もはや足並みの亂れたこの隊をまとめてゆくためには、僕一人の研究を犠牲にして、年内に歸國するより他ないことを知つた。學術探検が主目的でなくて、マナスルウの偵察が主目的であつた以上、いまになつてくやんでも仕方ないのである。

ところで、これから早速帆を揚げたとしても、こゝからカトマンズまで十六日、下手するとそれ以上かかる。カトマンズでは色々の事があろうから羽田歸着はどうしても十二月二十五、六日、まあ年内ぎりぎりということだろう。東

ルにC2をたてられるならば、これが正面ルートとして採用されるべきであるが、その可能性につきはいいさうか疑問の餘地がのこされている。

東尾根は雪崩の危険がないことと距離的に短いことから、僕が執着したルートだが、技術的に不利な點がわかつてきたから、來年のルとしてすゝめない。しかし水河のルートが不適當であるということになつた場合には、もう一度考えられるべき残されたルートであらう。

ティルマンの考へた北峰ルートは、北峰への取りつきがよくないため、われわれは誰も考慮に入れていない。しかしこのルートも東尾根同様、重くないのだから登

書室の樓上で岳友諸兄と會談の際、藤島君から今日は小島さんの命日だよ……と言われて私はハッとした。折から私は山岳書友の山川君と階下で小品展をやつていて、その事で頭が一杯이었다つたせいにか、島水の命日ということを忘れていた。そして濟まなかつたと思つた。

中村清太郎

案で、田邊、神谷、成瀬、加賀、藤島、佐藤の諸氏と一盞を傾けながら令嗣の準太郎さんへ記念の寄せ書きをした序に、私は思いつくまゝ「烏毛忌」というものを作つて、毎年この新雪の山の候に故人を偲ぶのはいかゞ——と提議したところ、満座に賛成の聲をきいた。たしかにこれは面白い意義も

があり、年月を經ていよいよその偉大さがハッキリして来る。鳥水臨終の廿三年十二月十三日は、舊十三日の月が宵空に美しく輝いていたのを覚えているが、今宵は薄霧のひまに星疎らで、月は廿七日の有明である。鳥水忌の創設は遅れたが、必要であることは間違いない……そ

あり、第一うっかり命日を忘れることなどあるまい。そのくせ故人のことは年中何かにつけて念頭を往來しており、私の毎朝の祈念の中にも出て来るのだから……。

んな事を考えつゝ歸途に就いた車中、同行の渡邊公平君からそれを是非會報に書けと命ぜられたまゝ、こゝに數行を列ねた次第である。

たかその方に適任の方々にお願
いしたい。こんな事を言つても
出不清の私は、その烏水忌の集
りに缺席することなども無い
とは限らないと危ぶむのだが、同
感の諸兄が相寄つて、故人とそ
の業績に就て感想や研究を語り
合う楽しさを思うと、今から心
の弾むのを禁じ得ないのであ
る。



でも、ちつとも苦情はない。むしろ、そうして來年のリーダーにバトンを渡して、肩の荷を軽くした上で家へ歸してもらった方が、僕としては望ましいことを最後の一言として、この通信を終らせてもらいたい。

★来年のルートの問題について

二七

つの希望條件である。もう一つ氷河をルートに選ぶかぎりアンナブルナのフランス隊のように、ある程度までラッシュ・タクトイッククセスを採用する必要があるはしないか、ということを申し添えておきたい。

(十一月二十七日サマのベースキャンプにて)

われわれのあいだでは、今迄にわかつた諸事情を綜合した結果、ラルキア側からDコルに登つて、そこにC2を設置するのがルートとしてよいのではないかという結論に達している。マナスルウのメ

講演と映画の會
マナスルウ探險隊基金募集のため二月十四日、一時、神田共立講堂で次の如く行います。

- 一、隊員壯行會
- 二、講演 竹節作太
- 三、マナスルウ百景(スライド)

谷川岳・肩の小屋について

—群馬縣觀光課への回答—

編集者より——會報一六三號の「山上展望」欄の記事につき群馬縣觀光課長味岡益太郎氏から抗議があり、日本山岳會として正式に回答せよとのことでしたが、問題の同欄記事が山岳會としての正式發言の如き感を與えたのは、一に編集者の手落。會員N氏のサイン入りの投稿を編集の都合上、前後を省略、匿名のサインまでカットしたためです。

従つて會が正式に回答する理由もないので、味岡氏の抗議文をN氏に届けそれに對する回答を得ました故掲載して群馬縣觀光課へのお答えとします。

尚このN氏の回答と共に味岡氏の抗議文を併載することが問題の所在を更に明確にし、かつエチケツトでもあるのですが餘りに長文なと紙幅の狭い關係上、出来なかつたことをお詫びする。

群馬縣觀光課長への回答

味岡觀光課長からの抗議文を拜讀して實は啞然とした。恐らく課長でなくその下僚の書いたものと思うが、課長の名で書かれているので課長宛に簡単に當日の模様を書いて回答とする。尚課長はその

日山には行かなかつたということだが、それなら小屋の中の出来ごとと課員から間接に一方的に聞かれたのであるから、私達と貴課員との間にどんな問答のやりとりがあり、貴課員がどんな態度をとつたかを課長たる貴君にお知らせしておく義務があると信ずる。

八月の某日、私達三名ガレ澤から雷雨にやられ十六時半頃肩の小屋に着いた時は小降りになつてゐたと云ふ全身ビショ濡れ、小屋の中は餘り暖かくない暖爐を囲んで多くの登山者がふるえていた。御承知の様に下は寝るところではない。

小屋番に今晩は幾人ぐらゐ泊るかとか聞くと四十三名程だといふ。夜になつて寒さが加つてきた。同行のBも盲腸炎手術後一カ月の身體、再發を心配したが九時半頃腹痛を訴えた。自分で小屋の人に何處かに寝る所はないかと尋ねたが何しろ一杯でねといふ返事。以下

兩者の會話。B「昨夜は五十何名も泊つたのに皆二階に收容したそうじゃないか」小屋「何しろ今日はTさんを連れて縣の觀光課が來てゐるのでね」B「昨夜より十名も少ないのにどうして二階に收容できなのを、皆満れてゐるから少し暖爐をのこしてももらえないか」小「この邊は燃料が不足でね」B「野營の小屋なんだから、丁度縣の人もゐるんだから上を整理してくれといひんだがナ、群馬縣はサビスが悪いなあ」と諦めて自分の席に戻つてきた所へ二階から荒々しい足音で二人の男が下りてきた。

誰だい、さつきから聞いて

いりや群馬縣はサビスが悪いのなんのといつてゐる様だが……

今日は縣の觀光課で觀光映画撮影のためTという人とKという人を連れて來てゐるんだ。Tさんは病後なので布團を二枚宛着なけりやならんし、それに觀光課長が來てゐるが課長さへも板の間に寝てゐるんだ。

Bも稍昂奮氣味で「板の間でもいい、布團もいらぬ。せめて身體を横にしたい。縣營ならせめて縣の方が整理をして皆二階で休めるようにしてくれてもいいじゃないですか」縣「今日は一杯でこれ以上詰められないよ」B「昨夜より今晩は少いそうじゃないですか」縣「いやそんなことはない。今夜の方が多い」

この頃三人目の人物が階段の途中まで下りて來て「文句をいう奴は下へ降りてもらえ」とか「降ろしちやえ」とか「後から來て何を云うか」とか罵り掛つても他の登山者の迷惑となるばかりだから諦めてこのまゝごろ寝で夜を明かすことにして引取つてもらつたのだが時既に十二時過ぎ、こんな深更に山を下りろといふ暴言は生涯忘れることが出来ないし、それが觀光課の役人の口から出たことに腹が据えかねるのだ。それでも小屋の人が恐縮して大きな薪を持つて來てくれたので室内も漸く暖かくなつたが、これで規定通りの宿泊料を拂つたことも氣分的には不満なものがあつた。二十餘年に亘る山行を通じてはじめての出来事だつた。

(S・N生)

「萬年雪と氷河のほとり」の著者

(下)

望月達夫

譯文が下手だがシャール・ゴオの面影の一斑はヤングの筆で遺憾なく現わされてゐる。少し年譜的なことを書きそえとゴオは一八八五年、マッターホルンの畫家として著名なアルペール・ゴオを父としてジュネーヴで生れた。二〇歳足らずでエギーユ・デュ・グワテールからモンブランに登り、ヴァローの小舎に一泊してグラン・ミューレから歸つた。同じ年兄弟と共にジュネーヴから自轉車でビーチュホルンへ行き、二〇歳の時にはE・モノド・ヘルツェンとグレボンのガイドレス初登攀をやり、更にブティ・ドリュエーやマッターホルンのツムツト校のガイドレス初登攀をなした。同年ヘルツェンやジャン・カッパインヌと未登のマッターホルン北壁を試みたが嵐のため成功しなかつた。

このようにして彼はシャモニーからツェルマット周辺の四千米級を登つた。彼は多くガイドレス登

スキー用品

東京・新宿駅前

かずみ

TEL (35) 2959

「山岳」索引に

ついて(下)

沼井鐵太郎



右の「總索引」は地方別、筆者別に大別され、前者は地形的分類、後者はABC順分類で、双方共記文題名と執筆名又は執筆者と題名が併記されている。並々ならぬ編者の苦心の作で何人も最大の敬意と感謝を表現せざるにはいられないと思う。然し乍ら右編纂の意圖は少しく純粋索引の域を脱したものであり、出来上つたものは寧ろ文獻目録的索引の種類と考えてもよいのではあるまいか。又地方別の後に論説、考證、研究、地形、地質、湖沼、動植物に關するもの、山岳語及山名に關するもの、寫眞に關するもの、山岳圖書、地形圖に關するもの、詩歌、隨筆、隨想、其他、雜、英文欄と小分けの分類があつて山岳名稱以外の事項が整理されてあるのは、いさゝか當時のコンヴェンションナリズムの分類配列なるかの如き感が深い。多言ははゞかるが、索引は萬代不易の純科學的分類で配列されるのが理想である。

また圖版——繪畫、題字、寫眞、スケッチ、圖表——は「總索引」には無視されておられ、文獻涉獵者が往々見逃し勝ちのものであるが、一つの圖版のみが或る事項について唯一の知られた貢獻であり得る事を知っている人も少くない。

るし、また德義的にもなさればならぬと考へる。

い。その意味で圖版も獨立した記文と等しく同列に扱うことが廣い意味での文獻記録として必要である。

筆者の「山岳」萬有題目索引はかくして一九五一年十一月から始まつて一九五二年三月にカード作製を了した。そして去年四月の役員總會に於いて筆者の動機及進行狀態を報告し大方の了解を正式に得たのである。その後第一原稿を五月二十八日に書きあげたが、この原稿だけではチェック箇所が多くて印刷原稿用にも不向きと思われたので、次いで最終原稿を淨書し始め七月二十七日に完了した。かくてなお残るチェック箇所は八月九日で一應けりをつけたが、最後のチェックは本會の事務所まで自分自身または有志諸氏の應援をえて完成したいと思う。以上、純粹萬有題目索引の理想は理想としても、實際には餘暇を利用して獨力での實行上不備の點が少からず、書き寫しの際の誤記も確率的に零とはいえず、決して理想に平行する製作方法ではあり得なかつた事を自白せざるを得ない。

學校山岳部報告等の索引等にも手をのばしたいと考へている。切に同好者諸君の應援を望んで止まない。

今度の「索引」のヴォリュームは大まかに見積つて優に「山岳」一號分以上になりそうである。終戦前の最後の三七年までとし、その以後は五年または十年毎に追加して行つたらいと思ふ。前述の通り記文、圖版題目の事物索引と人名索引とに二大別し、小分けは行わず著者名題名併記は行わず、日本文は五十音順、歐文はアルファベット順とすること、おおむね自然科學専門雜誌の索引形式に範をとつた。圖版は「圖版」と明記した。讀み方のむづかしい語、内容の一見解らない題名、同義語、略語、ペンネーム(匿名)等の配列註釋(引用便宜上)にも意を用いた。又、「山岳」の或る時代には登山通信を極めて重要視して各通信とも獨立形式題目にさせた事もあつたので、之と歩調を合せて「山岳」全部に就いて登山通信に記録を集録するべく努め、集會講演も同じく獨立記文視してその題名(若しくは筆者假設定の題名)及び報告者、主たる登山者、講演者名をも本索引に包含した。これは又登山史的資料引用の便宜を兼ねた意味でもあつた。

大體今述べたのが筆者編纂の「索引」の特徴である。要するにどんな人でも、どんな時にでも、どんな目的を以てでも容易に引用し得るような萬有題目索引の成立が念願である事を重ねて申し上げて大方の御了解を得たいと思うのである。

土曜會

のつとも

お茶の水にJACのクラブルームが完成したのは昭和二十四年三月、二階に別室が増設されたのは二十六年二月のことである。事務室、圖書室としてばかりでなく、いろ／＼な會合にも太い利用されているが、毎週土曜日、なにといいこともなく集つて、山小舎の午後ひとときにも似た閑談をたのしむ連中がいる。

都心の騒音雜音——これだけは世界に冠たり——から逃れたい氣持もあるだろうが、自分の屬するクラブの勞働氣を人一倍愛している人達なのである。

名譽會員加賀正太郎氏の好意によるスピリットを傾けて、話に花が咲くと、いつも切上げるのが惜しいようである。こんなことを繰返している内に、めい／＼の拂つたスピリット代から實費を差引いて、いくらか剩餘金が出て來た。當節耳寄りな話である。

そこでその一部を圖書室基金に寄附し、あとは年初來の出席率と納税高?とをにらみ合わせて選ばれた十數人の優等生が、師走十六日、にぎやかに楽しい一宵を過し、小學生が精勵賞を貰つた時のように喜んだのである。いゝ年をして何だと言ひ給うな、クラブとはそんな一面もあるものだ。

精勤者の名と回数を附記しておくが今年の暮れには新顔がズバリと並ぶようなことになると思はれる。張合がある。

尚當日加賀氏は夫人と共に來會され澤山の賞品——特に失格者に對して殘念賞——まで寄贈された。はまことに感謝に堪えず厚く御禮申上げる。

廿六年十二月十一日 土曜 五二回、田邊主計四七、成瀬岩雄四七、神谷 恭四二、吉田竹志三九、藤島敏男三九、加藤泰安三二、石原憲治二九、織内信彦二五、佐藤久一郎二五、日高信六郎二五、堀田綱一二四回

★マナスルウ遠征隊員決定

▼隊長 三田幸夫(五二)
▼隊員 高木正孝(四〇) 田口二郎(四〇) 加藤泰安(四一) 辰沼廣吉(三七) 村山雅美(三四) 山田二郎(三〇) 加藤喜一郎(三一) 村木潤次郎(二九) 山崎英雄(二八) 石坂昭二郎(二四) 竹節作太(四六) 依田孝喜(三六)

▼同科學班 中尾佐助(三六) 川喜田二郎(三二)

★マナスルウ寫眞の頒布について

遠征隊後援基金獲得の一助として先發隊の撮影したマナスルウ全容の寫眞——四ツ切、ヒマラヤ・エーデルワイスの押花貼附——を岳友諸賢に二千圓でお頒ちしますから奮つて御申込下さい。

初冬の鹽見岳

鹿鹽から小瀬戸の湯へ

村井米子

颯風をやり過して出發した十一月六日朝の伊那谷は、車窓から仰ぐ木曾駒連峯の、新雪の眺めが素晴らしい。南下するにつれて目ざす鹽見や今夏曾遊の惡澤、赤石、聖なども鹽見するが存外に雪が見えない。

「どこへ登るかね。今年は十日位雪がおくれているだよ」

土地の人が日高、村井の老童組と古澤、小倉の壯年組を見守る。

伊那大島でバスに乗って二時間、小湫川添いに入る道は斷崖で、相當に肝を冷したが、黄色がちの紅葉は、澄んで美しかった。

鹿鹽の稻の干してある山村風景も公孫樹の黄葉が特に美しく、鹽川にのぞむ山鹽館の山宿らしい気分と親切さが私達を喜ばせた。

翌七日午前七時廿分、霜で滑べる吊橋を渡って晩秋らしく澄んだ空の下を登る。一時間で澤井部落が高く仰がれ、ハゼにかけた稻と

障子の白さと朝日に美しい。この山田が餘り高い尾根にまであるのに驚いたら、

「千五百米まで水田があつて、日本で二番目の高さだそうです」と、若い衆が答えた。

十時ウチゴメ澤で小憩、すぐ奥の越路澤の前、廣河原まで林道の工事申だ。來年は車が入るといふ。鹽川ぞいの林道はトクサが多く、やがて十一時半南澤入口で煮食する。

一時に立ち、廿分後南北澤の別れから急登し、針葉樹林に入つてコブの木休場は二時四十分、西が開け鹿鹽の溪とはるかの木曾駒が美しい。尾根筋へ出て樹の木、大掛（三時半）を過ぎると、仙丈岳がすぐ北空を壓して雄大に豫想に反して黒々と現われた。

大河原からの登路と合し廿分後の四時半、日本一高い峠、二六一五米の三伏峠上に立つた。夕陽に仙丈、甲斐駒、北岳、間岳など限りなく美しい。少し下つた右手の崖に立つと、舊知の惡澤、赤石、聖の面々が夕雲の湧き立つ中に並んでいる。時に気温零度、峠は二度だった、ぐんぐん寒くなつた。

鹽見岳に向つて、三伏澤を十町程下り、三伏小倉着は五時二十分。夕陽に新雪が點々と白い。幸に水も薪も豊富である。山は馴れぬが二人の農村青年の働きで寝袋も上げられたし、温い食事と火に恵まれ、小倉さんのラジオで氣象

通報まで聞き山小舎の夜をたのしむ。

八日朝、夜中吹き荒れていた風は収つたが白霧がたちこめ、やゝ天候不調かと案じつつ食事するうちに霽れた。

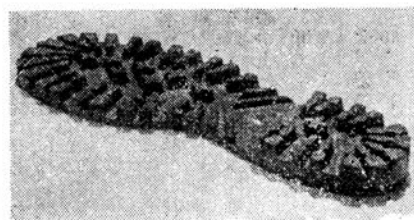
見よ、樹々の霧水の白さ、射し入る朝日の眩ゆき初冬の山氣分は十分である。八時四十分小舎を出る。寝袋その他は青年に托して下ろし、四人のみの一行、樹木の林を進めば一夜に霧水の化粧した鹽見岳が輝いている。が、かなり遠い。本谷岳頂上は九時四十分、尾根づたいのしばらく歡聲しきり。小一時間後尾根を巻き、樹林中の権右エ門澤水源に一時一五分着、軽く食べて休む。

いよいよ鹽見岳のリッジに出たのは廿分後、左手は南荒川谷側のひどい崖だ。下り口を探しつゝ、這松まじりの岩尾根を登り、天狗岩の下とおもう這松の中で一時四五分より廿分ばかり休みつゝ南望すれば、目の前にひろがる大井川西俣の水源林の線が濃い。

天狗岩の右をからみ鹽見頂上（三〇四六・九米）着は二時五十分。すぐ東に富士山が現われ、北岳、甲斐駒、間岳、農島、仙丈、遠く乗鞍、木曾駒も見え、赤石連峯も南に、素晴らしい大觀。いかにも南ア中央部の山の初冬らしい深み……。四五分以下山しはじめたが、さて下り口が一と問題だった。三時頃頂上から一段下つたガレ

を南荒川谷へと向つたが、ひどく急の上に土が凍つて堅く、ビッケルもろくに立たない。しかもアイゼンは小倉から返した。雪のあるところを選んで下りつゝ足跡らしいものを喜んで通つたら、何と熊の足跡である。やがて瀧が出たので左へ辛うじて巻き、また瀧が出て、左の谷へ巻きと四度程しているうちに、夕陽が迫つた。また下は瀧で、水と岩とを、滑れば萬事休すである。右手の草つきによつて腰を下ろす場を発見したのは六時、四人寄り合い、一枚の防水布をかぶつてしやがむ。

夜の長いこと——遅くなつて月が出たのを見れば前の黒檜山と同じ高さゆゑ二千五百はあろう。晩方コッヘルで沸した湯の温かさ。幸に九日の朝も快晴。遠く槍穂高らしい山も浮び、無事明かし得たためかひどく世界が美しい。午前十時半零下三度。廿分後に出發、草つきを登る。これも急でシカ道らしい跡を辿り、右手の澤の頭に出たのが十時。また熊の足跡のある雪を過ぎ、四十分後澤へ出て石を渡る。北荒川の下、澤の合流點に十一時四十五分着、流木をあつて火を焚いて中食。一時四十分に出てケルンも何もない河原の石を、あちこち渡渉しつゝたどる。三時小憩し、鹽見頂上を見上げた後は、河水も深い。瀧を巻いて右岸の林を辿つて後左岸につき、小高いところにもまた野營と決めたのは五時二十分。今夜は、流木も多



日本山岳會
御用
ビブラム

山友社 高橋靴店

東京都新宿區三榮町3
電話 四谷 (35) 1929

シプトンの達見

“Upon that Mountain”より學ぶもの

成瀬 岩雄

この書は出版以來既に拾年、今頃になつて新刊紹介でもあるまいが、エベレストにだけでも數回出掛けた英國山岳界のベテラン、エリック・シプトンの登山歴みたいなものであるし、ヤングの云う「學生時代から既にエクスベディションに出掛ける事の出来た多幸な少年時代から始まつて、ヒマラヤの山中でさきの戦争の報を知る迄のシプトンの「通歴の書」なる言葉に惹かれて眼を通して見ると、成程、その少年時代にウィンバリーの「アンデス行」を読み「二萬呎もの高い所に登れば、もう死んでも本望だ……」と思つたと云う童心の憧憬から始まつて、先の大戦勃發の直前、かねてから再會の約束の地たる「雪の湖」——カラコラム山中——に一足先に着いてその山仲間たるスコット・ラッセルの到着を今や遅しと待ちあぐんで或日、氷河の遙か彼方に幻影の如く浮び出たラッセルの一行を発見し、再會の喜びにはやる心を抑えつゝも新雪におもわれたクレバに氣をくばり乍ら右往左往して霧の中を双方で近付いて行くと、やつと聲だけが聞きたる位の距離に來た時、無線の受信によつて捉えた云うラッセルの「ドイッ」と戦争になつたぞ——との微かな

叫びを聞き、この山の中でこんな事を聞くとは思ひもよらなかつた。瞬間、クレバが大きく開いて無限の底に落ち行く様な氣がした。暫らくはあの、高い所で猛吹雪の後によく遺う無氣味な静けさにシーンと壓せられて唯茫然と立止まつていた。併し人間と云うものは油の乗り切つた時に思ふ存分活動出來たと云う事は幸運だ。との劇的描寫を以てこの書を結ぶ迄の彼の數年に渉る通歴の書であり、仲々讀み應えのある書である。それに從來の英國の逆中の行き方とは凡そカケ離れた登り方をしているし、莫大なる費用を掛けずともエクスベディションはやれるものだ云う事を力説し、又現に彼のその體驗記なのであるから、大いに教えられる所がある。紙面の都合では詳細に渉る事の出来ないのは残念だが、極く概略を拾つて見ると

「一九三三年のエベレストのエクスベディションに加つて、自分はある大掛りな隊を組織して行くのはつゞ／＼間違ひだと思つた。事實、今迄に一回のエクスベディションで二回以上のアタックを試みたエクスベディションなんて無かつたではないか。アタックには二人が一番いいと云う事だけはもう既に判然としてゐるのだから、二回試みるとして四人だけで十分な筈。それを十四人ものクライマーでやるうなんという事はあり得ない事である。或者はそれは病人でも出た時の補充に必要だからと云うけど苟もヒマラヤの様な高い所に登る事が出来、又最後のアタックに加わる事が出来ると萬人から認められてゐる様な人間で事實に、アタックという時に病氣で駄目になつたと云う様な事は無いではないか。假りにあつたとしても、色々の惡條件の下では登頂出來ると云うチャンスは掴むと云ふ事は非常に少ないのだから、そのチャンスを掴む事の重大さから云つたら人間の病氣なんて事は問題にならない。一步譲つて豫備の人間を持つという事はまあいいとしても登頂出來そうだと云う人間一人に對して三人の豫備は要らないだらう。第一人數の多いという事は隊員の内で自分は誰かが落伍した時でも無ければ用は無いのだと云う様な氣を起さず様になつてはそれは重大な問題であり、そんな事があつては各人の心理的負擔を重くし、結局は全體の能率の低下を來たして来る。それに假に團體精神でやれと云つて見た所でそれは唯議論だけの事で、議論でエクスベディションは上手く持つて行けるもので無い。皆、誰だつて競争心はあるのだから其處に軋轢も起るだらうし、それよりは自分も重要な役目を負つてゐるのだと云う事を各自が認識して、仲間同士の役目をよく知つてゐる少數の隊員でガツチリ組織したエクスベディ

ションこそ望ましい。自分の理想とするエクスベディションは、アルプスで相當の經驗を積み、確かに高い所迄行けると云う確信を持つた六人のクライマーと、嚴選の上特に訓練を施した約卅人のシエルバ、ポーターを以て組織した隊が望ましい。そして各人の裝備、荷物を可成り減らし今迄のエベレストの費用も平均一二五〇〇ポンドも掛つていたのを二五〇〇ポンドから三〇〇〇ポンド位でやつて行けると思う。こういう隊であつてこそ機動性にも富み相互の緊密性も保つて行けるのである。

第一、ポーターを澤山行列して連れて歩くこと云う事は隊員としてもち／＼眼が届かず、一九三三年の時等は途中でポーターの靴が盗難に遭つたりして困つたのであるが、あれがもつと盗まれたら遂にエクスベディションも御破算になつてしまふ所であつた。

自分の山に入る時の氣分から云つても大部隊でガヤ／＼と出掛け行くのは大嫌いだ。毎日夕方になると小天幕村が出現して騒々しく、又朝は出發の時に賑わし騒々しくして大部隊が静かな谷に入つて行くのは凡そ我が山への懷ろに近付いて行くこととする時のあの軽い自由な氣持とは遙かに縁の遠いものである。本當はあの氣分こそ、山に登らんとする時に上手く成功する時の重要な精神であるうと信ずるのである。

今、自分は世間の注目の的となつてゐるのだから云う事を考えるな。唯いづらか高い山に登つてゐるのだ。併し根本的には今迄の山登りとチットモ違ひは無いのだと思つて登ればいいのだ。樂な氣持で登ればいいのだ。それでこそ却つて成功の機會もあり又樂しめる。次に資金の問題だが、エベレストのエクスベディションの費用は幾らでも出るのだから如何してもつと金を掛け無いのだから云う人の聲を耳にするが、費用を澤山掛けたからと云つて、エクスベディションの能力をより以上に發揮出來るものではない。むしろ却つて餘計なものに澤山集めるだけで混亂のものになるばかりで、もつと／＼重大なる事がおそそかにされてゐる。例えばロンドンからロンブック氷河迄遙々ジャンパンのケースや營養食料品を持つて行く様な事をする位ならばポーター全部の裝備——天幕、靴、寝袋——を我々のものと同じものにしてやつた方が遙かに効果的である。そんなに金を使わなければならぬと云うのならもつと有効な方法がある。若い連中でヒマラヤに行きたがつてゐる連中は澤山いるのだから之等の連中を拾數組に分けてヒマラヤのエクスベディションに出す。此の事は上手く行けばエベレストの登山にも直接の關係がある。と云うのはエベレストのセレクション、コミッティーもこの機會にいゝ連中を選び抜く事が出来るではないか……

以上はそのエクスベディションと云うものに對する意見の概略であるが、私は勿論日本の今のエクスベディションに其思つてを鵝呑みに出来るとは毛頭思つてゐないが、それよりもこれだけの言葉を

11頁より續く

堂々と云つてのけられる人間をエベレストのリーダーに持つて行ける英國登山界のレベルは羨ましい。言葉は悪いかも知れないが「ヒマラヤ擦れ」も此處迄来れば誰も文句は無からうと思う。しかも之が拾年前の言葉であり、現に昨年のエベレスト登山等には之を實行に移してゐるのであるから偉いものである。今の日本の登山のレベルが奈邊にあるかは今度の先發隊が歸つてくれれば大體の所は判るであらうけど大いに參考としていゝ言葉であらう。

次に云い度いのは彼が「エベレスト登山の現状についての心情」を述べてゐる點である。さすがは英國山岳會の傳統の燦たるものであるとつくづく思つた。この精神だけは我々としてもまる／＼鶏呑みにしてもいゝのではないだろうか。即ち彼はこう云つてゐる。

「エベレストのエキスピディションと云ふものは登山の本来の根本的單純性と云ふものを遠く離れてしまつて、世間からは登山夫自體の眞實とは凡そ違つたものに見られる様になつてしまつたのは誠に残念な事だ。登山家が世界で一番高い山へ登り度いと云う其氣持は當然の事であり、少なくとも世界で一番高い山への登山計畫に興味を感じると云う事は當然の事で、それは自分もよく判つてゐるのだが、不幸にしてエベレストが一番高い山であるがために一般大衆にとつて唯何んでもレコードを破らねばならぬと云う様な事で新聞紙上に人氣を呼ぶ様になり、登山の「最良の傳統」と考へ

られていた所のものから離れてしまつて、本来のエキスピディションの値打とは凡そ懸離れたものになつて來てしまつたのは遺憾な事である。

それは一つにはあんな大掛りなエキスピディションにするから其の資金も募金しなければならぬため世間に噂が擴がる事を防ぐ事が出来なくなつてしまつたので、凡そ登山の本来の精神の素朴さとは似ても似つかぬ派手やかさと云うものがエベレスト登山に附纏う様になつてしまつたのだ。その成功は自然に對する人類の勝利の代表的なものであるとか、エベレストの登山計畫と云ふものは近代青年の精神のシンボルである等と云われる様になつてしまつたのだ。

本来登山と云ふものは第一の目的は地理學的興味から始まり、その次に登る事が目的の登山と云う事になつたのだが、エベレストだつて結局其以上でもなければ其以下でもないのだ、この二つの目的と少しも違わない。別に何も特別の事はないのである。今迄の普通の登山とちつとも違わないではないか。今や、我々大多數の登山家の氣持と云ふものは自分の友達の云う事に盡きるとする「何んでもいゝから、早くエベレストは登られてしまへ。それで早く本来の登山の精神に歸ろうじや無いか」と。唯、山に登る事それだけじゃ無いか。それなのに色々つまらぬ問題の尾ヒレをつけれと云う事は甚だ残念な事だ。

圖書紹介



山日記 一九五三年版

日本山岳會編、A5判三三八頁
地圖一六葉 若溪堂刊 二二〇圓
新しい「山日記」について思い浮ぶまゝをします。

〇紙質、印刷が著しく改善され、手頃な厚みになつたのがよい。これならば上衣のポケットが蛙を呑んだ蛇の腹のように、ふくらむこともあるまい。

〇本文の諸項、從來のものを取捨し、新たに數項を附加した編輯ぶりは苦心の跡が窺われる。

「登山の注意」「冬期登山」を冒頭にものつてきたのも、登山を志すほどの者ならば、先ず何を措いても、この位のことはい心得てからにして貰いたいという意味であろう。不心得どころか無心得の登山者が餘りにも多すぎるから。

〇十六葉の概念圖。北海道の二枚など、筆者には大いに興味深い。一般にはどうであろうか？東京附近で秩父山塊の部を缺くのは、あの深々と黒木の茂る山谷を愛するものにとつて、稍物足りない。

〇日記欄は使う人によつて、それぞれ注文が異なるが、横線はあつた方が書きやすいようだ。

が滋種の手引となつては蛇足である。〇山小屋欄は、改廢常ならざる日本の山の現状では、編輯者の最も苦心を拂うところであらうが、それだけに最も利用されるものこの欄だともう。瑞西山岳會のヒュッテン・ブツのようなのが日本でも欲しいが、これはチョット急には望めない。

〇登山團體一覽表をみると、いつも思うのだが、日本は世界中で登山團體の数が最も多い國だらうといふことだ。この日記に收録された数はなんと九百四十三。これは一體何を物語つてゐるのだらう。自分の屬する團體名があるのかないかと探す前に、ひとつ考えるべきである。

〇山案内、山岳圖書、登山日程の各項が今年度削除されたのは、それ／＼理由があつてのことだろうが、中でも登山日程はあたかも料理のメニューみたいに、眺めていただけでたのしいものだから、形式や記述方法を變えて復活を提案したい。

〇山日記が啓蒙的な使命をもつてゐることから「日本近代登山小史」とでもいう簡略な三四頁に収まるものを載せてゐるのは、どうである。歴史を知らなくても、本を讀まないでも、山は登れるという人ばかりでもあるまい。

〇應急手當以下の項については割愛して、今年度山日記の中の幾冊かは、マナスルウ試験隊員のポケットに潜んで、ヒマラヤの巨峰に見參するであらう苦心と努力を大いに多として、この批評と

も紹介とも希望ともつかない一文を終らう。(藤島敏男)

韃靼の山

Mountains of Tartary:
London, Hodder &
Stoughton, pp. 224: 20

『週末の羚羊狩りをおわつて私はカシニガルへの歸路についた。山麓のある泉のほとりに日曜の夜を過した私は、晩近く唯ひとりそこを發足した。星空にたちはだかる絶壁の影のほかには何も見えなかつたが、山路をよく知つてゐる私の驢馬は元氣な足どりで歩きだした。ほの明るい曉の光が訪れると驢馬の足なみは調子のよい駆足にかわつた。やゝ強い風が頬にあつたが、前の日の活動で私はひどく睡氣をもよほしてゐた。のしかるような谷間の兩岸はものおそろしい色合に變つてゐた。それは文字通り不毛の土地であり暗い空洞のような谷が深くきれこんでいたのである。そして驢馬のひずめの音だけが、ちやうどこの死の世界の静けさを破るたゞ一つの音でゝあるかのよう、この谷間にこだましてゐた。

地形が急にかわつて谷間はおわり、われわれは平らな砂漠に出たが、それはさらにしずかに傾斜して廣い平原へ續いてゐた。行手は一面に紫の影に深くおゝわれ、砂漠はその影の下に沈むかのようにみえた。その紫の影の届かない彼方には、遠く近くおゝらるる氷の山々が聳えていた。クシニガルの圓いドーム、チャクラギルの双塔、ボスタン・テレクの岩山、そ

ヤの登山と云うものに對して實に不幸な影響を残したのである。ヒマラヤに出掛けるには莫大な費用を掛けなければ駄目だと皆が考える様になり、イタリア、ドイツ、フランス、各國連合等の登山隊のエキスパディションがエベレストの初期の登山に相次いで行われたのであるが、之等の登山隊は非常に大規模に、浪費的に行われ、エベレストの初期のエキスパディションも随分金は使つたが其以上の大掛りなものになつた。

まるでとりとめも無い空想的な裝備が行われ、ダイナマイトを使つて障礙物をブチ壊したり、飛行機から補給物を投下したり、餘計な手間を要する様な食料品が疲勞したクライマーの爲に用意せられたり、澤山の人間が氷河の上迄荷物運搬のために動員されたが爲に農繁期の手不足から翌年には飢饉に迄ならんとした様な事もあつた。

ヒマラヤの偉大なる先覺者——ロングスタッフ、コンウエー・ケラス、ゴッドウィン・オースチン・フレッチャー、シユラギントワイト兄弟等の遺した教訓が忘れられ、又無視せられていたと云う事は誠に残念な事だ。

之等、大先輩こそは實に簡素な用意で、しかも偉大なる業績を遺して行つたのである。

未だ金さへ掛けられエキスパディションは上手に歩くと思つてゐる人は澤山いるけれど、自分は狭量かも知れぬが規模の小さい、ガツチリしたエキスパディションの方が遙かに精神的にも、物質的にも勝れたものであると云う事を信

じて止まない。

又何時かは誰かヒマラヤの高峰に再び眼を向ける事があろう。其時は私の意見を念頭に置いて呉れる事を祈るものである。

と結んでゐるがさすがは英國登山界のベテランの言葉だと、私は感心した。

之の一節だけは日本でも今やヒマラヤの計畫を前にして念頭に置くべき事では無いだろうか。

最近の今西隊長の報告によればスイスの此秋の登山隊はスイス一流のガイド連の寄集めでやつて來てゐると云う。ダーズリンが何處

であろうと、カトマンズが西であるうと東であるうと、其んな事は一向にお構ひなし、ヒタ向きにエベレストの頂上一本槍で、牛馬の如き屈強な連中を選びすぐつて集

め、それにとつてもない素晴らしい裝備をあてがつてやつてゐるとの事を聞いたり、又島田君からスイス隊が英國と共同でエベレストを

やり度いと申出た時に、ロンドンからシプトンが態々スイス迄飛んで行つて協議した揚句、結局裝備の點で折合が盡かず兩國別々にエキスパディションを出す様になつたのだと云う話を聞き、前述のシ

プトンの言葉を思い合せる時、スイスの連中と英國の連中との違いが此處に判然とした様な気がするのである。と同時に私はその昔、

コンウエーが南米のアコンカグアに出掛けた時の事、頂上の數歩手前に迫りながら頂を踏まずして

引返したと云う彼の手記を思ひ出すには居られないのである。

實はコンウエーの出掛けた一年程前に彼の年來の親友たるフイ

マラヤの計畫を前にして念頭に置くべき事では無いだろうか。

れからなお名も知れぬ山々。その山々は消えゆく星ののこつてゐる水淺葱の空に、あくまでも白く鋭くたつてゐた。私の睡氣は、この歡喜にひとたまりもなくぬぐいきられた。私は驢馬の足を早めた。進むにつれて氷の山々はつぎつぎにピンクに染まり、やがて燃えるような黄金色に輝くのだった。

……これはカシユガールの思ひ、出の中でも一番私の印象にのこつてゐるひとつなのだが……

……というふうな書き出しで、この書物ははじまつてゐる。著者シプトン氏については更めて説く要もあるまいが、エヴェレストやカラコ

ラム探險のような大がかりな企てに對して、この本にもられたような氣輕な韃靼の山旅の中にも測り

しれぬ喜びがあり、山のためしめは決して一面的でないことを、著者はその豊かな経験をとおして語つてゐるのだ。

文章のすぐれてゐることも群をぬいでゐる著者のことだから、本書の敘述もわるかるう筈はない。山のことは、舊友ティルマ

ツツジェラルドがこの頂に初めて立つたのだが丁度コンウエーがこの頂に正に達せんとした其の頃は、散々苦勞して登つたフィツツ

ジェラルドの著書が未だ出版されていなかつたので、正に出版に至らんとする彼の著書の權威を害ねてはならぬと思ひ、頂を踏むのを遠慮したと云うのである。

フィツツジェラルドが何ヶ月も掛つて頂を踏んだのを自分が一週

間そこ／＼で頂を踏んだと思われ

ン氏と行を共にしたムンターグ・アータやボグド・オラのほかにチャタラギルやボスターン・テレクのことなどが含まれてゐる。

會報一六二號に短い紹介があるが最近圖書室へ新たに加えられたので一寸述べておく。(M)

ALPINE JOURNAL

Vol. LVIII, May 1952,
No. 284.

主な内容はモンブラン・ブレンドの新らしい登攀記事が二つ。

それからマルセル・クルツによる Maurice Cretet (1872-1948) の傳記。クルツの筆によると彼は

The greatest guide French Switzerland has ever had であり、you engage him as a guide, you leave him as a friend. With him, nothing is impossible. とかゝれてゐる。

追悼欄には會籍七十年に及ぶ名譽會員 G. P. ベーカーの記事があり、彼はノーマン・コリーやス

リンギスビーの仲間でダンブランシュのフィアエーゼルグラートやシュレックホルンのアンダーソン

グラーターの初登攀者でもあつた。その他ニュージランド・アルプスの先驅者 R. S. ロウやヘンリー・ヘークの追悼などがある。

ノーツ欄には秩父宮が名譽會員に再び迎へられたこと、一九五一年九月末ミュンヘンで開かれた國際ヒマラヤ會議の短い記事がある。一四四頁、寫眞十四葉。(M)

REVUE D'ALPINISME

Vol. 5 1951-1952

ベルギー山岳會々誌が久々に届いた。今號の内容は一九五一年のベルギー、フランス兩山岳會で行つた南米バル、ユルディレラ・

プランカへの遠征に全員が充たされてゐる。本遠征については會報一六三號書評欄にあらましがあ

から省略する。挿入の寫眞十七葉はすべて美しい。約 B 5 判一〇〇頁。(M)

るのかと、本當に自分の眼を疑つたのである。

今度こそはエベレストの頂上を踏むかも知れないスイスの連中も羨やましくは思ふが、それ以上に私は遠く前世紀の時代に於て既に

コンウエーの如き先輩を持つていた今日の英國山岳會の傳統こそ、尚更羨やましく思ふのである。(一九五二、一〇、一五)



信 通 員 会

米國の登山界

錦 織 保 清

American Alpine Club が總本山といった形でしょうが、實踐的に登つてゐるのは各州にある代表的な一、二の登山團體でしょう。コロラド山岳會(コロラド州)シエラクラブ(カリフォルニア州)マザクラブ(オレゴン州)邊りが山のある州だけに outstanding であるといわれています。

學校山岳部と一般山岳會とに分れてゐる我國にくらべると、こちらは學生だから特に大きな山行をやるというような傾向はなく、一般山岳會の概念が日本の學校山岳部と似てゐるようです。學校山岳部でやる基礎的な登山技術の指導がシエラクラブでも行われ、ビレイニング(確保)の練習に一日を潰してゐるあたりは、彼等の確實な登山の態度を示しています。クラブの岩登り部會のメンバーになるために、最小限安全テストとして、ビレイニング(ピトン使用の

場合とピトンを用いぬ場合と)及び一五〇フィートのラッセル(懸垂)及び二種の(トップ及び中間)綱の結び方が試験されます。二〇ポンド以上の大男がテラスから飛降りると、ナイロンのロープでも、流石に擦擦して痛いです。もしビレイを失敗しても、別に二本の補助ロープが二〇フィート以内で飛降りた男をとめてくれるようにしてあるので安全ですが、飛降りる男は、少しは傷を受けるわけで、リーダーともなれば飛降係なのでつらい話です。

十三年餘りも前に、準備會のときに大學の空いていた教室で、關根氏等から「ソデとエリのあるシャツを着て来い」と説明された、新人時代が想出される。「ソデとエリのあるシャツ」という言葉が、このクラブのリーダーから、打合せの電話で傳えられた時には、言葉は日本語と英語の異なるだけで、そのリーダーとしての注意が、私を微笑せました。それにも拘わらず、行つて見ると、Tシャツやボロシャツだけで來てゐる連中もあり、リーダーが注意を與え自分のシャツを貸してやつたりしてゐました。

ヨセミテ國立公園、ワイオミング州テントン地、コロラド州デンバー及びボルダー地帯はこのアメリカ合衆國の岩登りの中心地となつており、岩壁で、ツェルトサツクを被つて、四泊もして登るというのですから、穂高や剣とは大さが大分違います。さて連中の山の道具ですが、我國のリックサツクはキスリング型が普及してゐるのにくらべて、全

く昔の三つポケット式のもの、枠のついたサツク、更にバックフレイム(背負子)という昔のものと一驚しました。ロスアンゼルスのだウスタウンで背負子を擔いだ加州大學(UCLA)の山岳部員に逢つたときは近代都市とそこを歩く山男の姿の古式ユカシさ?に妙なものを感ぜました。但し、背負子はアルミニウムのパイプとナイロンの紐で作られていました。勿論キスリング型も輸入品で二七ドル五〇セントで、新しい改良されたものがありますが、普及されてゐることはお世辭にも申せません。リックサツク以外は、物質の豊かな上に、爲替管理のないアメリカは我國の比ではない諸道具が用いられてゐます。

ロープはナイロンが壓倒的に廣く用ゐられ、特に Stabilized Nylon Rope といわれるものは切口がほどこない仕掛けのもので、ナイロンロープの端末が、いやな感じのするのを防いでくれるばかりでなく、従来のナイロンロープを非常に前進させました。

靴は Bramani sole (ブラマニ底)が非常に多く Edging Teeth 即ちアイゼンの短い爪のものと併用して進んでいます。これはK山莊のカタログにもはるかに前に紹介された名前で、ゴム底にネールの型が浮んでゐます。フリクションのための軟かさ底の縁に重さがかゝつたときのための堅さとの割合が、ブラマニ底の良否を決定するわけで、アメリカ國産グッドアイア社のものは、スイスのものに比して半値近くもやすく、またそれだけ良くないといわれていま

す。

カラビナ、ピトンは我國のものと同じで、むしろK山莊で以前作つていた薄手の「ガルバナイズ」したものを考えると我國のものも進んでゐるときえ思われま

す。しかし横型のものが七種もあり、現在我國の専門店でも二、三種しかないのにくらべると打込むときの容易さが倍加します。

クランポンは十二本爪が多く一つ買つて歸るつもりです。

天幕(シート付)は二人用ナイロン製で五〇ドルというから一寸學生には買にくい。しかし、一人當り一ポンド乃至一ポンド半の重量になつており、天幕の運搬に體力を消耗する冬の登高を大いに助けることになるでしょう。

ナイロン厚手地のウインドヤツケは一七ドルという高値です。

國體所感

内 藤 馨

先般の國體に際しオーブンとして参加した私見を申し述べます。悪しからず御笑覧賜わらした。

一、携行品の所持を明瞭にすること。地圖、磁石が注意書に抜けていたが、これは現地につき各パーティの補導員が休憩時にサブザツクの内容品を點検する位の指導性をもちたく、講評の際云々するはチグハグの觀がある。

一、歩行登攀力が微弱で各縣パーティとも今回の如きコースの程度で弱音を吐くようでは、ものゝ用に立ちかねる。完全に歩行能力を養ひ、リズムもそれにつてからのことかと思ふ。

一、服裝、裝備のバランスなく、非常食、救急用品にわたつても同様と思ふ。パーティの活動についてその自主性が少なく、サブリーダーの助けが一般に望ましいと思われた。

粉雪の大東岳

大 橋 克 也

十月、谷川から歸つた直後だったに學校で不注意から肋骨にひきを入れてしまいましたが、幸い恢復が早く、登高欲も前より一層高まつた翌月、大沂澤を廻り落葉の洪水とも言うべき峠を越えましたが肋骨の調子は上々でした。

引續いて今月十四日は新雪の大東岳に登つて、快晴の頂上で、素晴らしい白さの鳥海、朝日、飯豊と語らいつながら一時間ものんびりして來ました。獨りだつたので、粉雪五〇センチのラッセルにはずい分と汗を奪われ、所要時間は丁度夏の倍でした。

その時の蜜柑の美味さと、麓の炭焼小舎で働いてゐた乙女が山奥にしては不思議な程爽やかですがすがしい容姿だつたためとが未だに忘れられません。今、冬山のためにビニールのオーバershシュ1ズを準備中です。(仙臺にて)

會務報告

小集會記事

第一四七回 十一月廿二日(土)

講演 「マナスルウ踏査先發隊から歸つて」

講師 會員 田口二郎氏

第一四八回 十一月十三日(火) 夜

講演 「マナスルウ一周」

講師 會員 今西錦司氏

講演に先立ち正面にかゝげられた秩父宮殿下の御寫眞に對し一同起立して黙禱をさへげた。今西氏は最近のヒマラヤ遠征の動向からときおこし、今次マナスルウ・リコニサンスの間に得た結果を諸々の觀點から語られ、つゞいて隊員高木正孝氏が主としてネパール・ヒマラヤと歐洲アルプスとの比較について述べられた。毎日寫眞部から届いたばかりの十數葉の寫眞が回覧され、最後に松方理事長から隊員へのねぎらいの言葉と本年の登山隊に對する抱負が述べられ九時會を閉じた。司會成瀬理事。參會者九十餘名。

役員會

十一月 役員總會(十九日)

議事 ルーム二部増築の件・第七回國體登山部門報告・山日記、會報編集報告・集會係報告・月例會計報告

十二月 役員總會(十九日)

議事 次號「山岳」編集委員の件(現在の三名に田中榮藏氏を加えること可決)・交野武一氏を理事に推薦の件(可決)・第九回國體登山の件・第七回國體記念アルバムの件・静岡支部の件・ヒマラ

ヤ委員會事務局報告・會報編集報告・月例會計報告

ヒマラヤ委員會事務局

既に新聞紙上で御承知の通り今西隊長以下の先發隊は、昨年十二月廿八日午後五時BOAC機で無事羽田に歸着し、翌十九日今西隊長からヒマラヤ委員會並に事務局準備委員に對し報告がなされた。一方本年のブレモン・スローン期に派遣される本隊の準備は着々と進捗の途にあり、近く隊員の選定も完了される筈である。尚本計畫當初から盡力された毎日新聞社取締役森正藏氏は過般來心臟病で加療中のところ一月十一日逝去された。日本山岳會並にヒマラヤ委員會は衷心哀悼の意を表する。

有志晚餐會

昭和廿七年十一月廿一日午後六時より神田YMCA食堂にて開催、參會者六十名、武田、鳥山、近藤の長老それに來賓にはネパール留學生クリシュナ氏を迎え新舊會員を網羅して交歓を深くした。食後、武田氏より明治時代の登山の話、また法隆寺修理現場よりはる(ト)夢じられた石井鶴三氏より隨想、山形から出席された後藤幹次氏より第七回國體のことなど、それ(ト)話があつて九時閉會。

マナスルウ踏査寫眞展

今西隊によつて撮影されたフィルムは千枚を遙かに上廻る筈だが取敢えず整理のついた中から百點を選び毎日新聞の主催で一般に展示された。ヒマラヤは餘りにも雄大であるため寫眞では殆ど眞を傳え得ないといわれているが、約二米平方大のマナスルウの全貌を示す寫眞の如きは中々素晴らしいものであつた。未整理のものが一日も早く選りわけられ、國際的な水準をもつ寫眞集に收められる日の近いことを期待する。(一月十三日から十七日まで新宿三越六階)

ルームで山岳畫小品展

中村清太郎、山川勇一郎兩氏の山岳畫小品展を十二月十日から十八日まで本會ルームで開催、好評を博した。

會報編集費寄附

二千元 牧野 衛氏

マナスルウ先發隊歡迎會

マナスルウの登路發見を主たる目的とした今西隊長はじめ毎日の竹節記者を含めた全隊員を迎え、會員六十餘名が顔を揃えて心からの歡迎會を開いた。松方理事長の歓迎の辭、隊長及び隊員一人々々からの挨拶があり、特に招じたクリシュナ氏からも挨拶があつた。一月十四日(水)午後六時―八時半。於フロイラ(三井別館)

★會費未納の方へ★

年度末も近くなりました。本年度會費未納の方は至急御納め下さるよう特にお願い致します。
・東京支部會員 八〇〇圓
・地方會員 六〇〇圓
尚「山岳」四六・四七年號は本年度會費納入済みの方へ配本を了つています。

★山日記 一九五三年版

新しい山日記が十二月中旬發刊されました。今度は色々の點で改訂されています。會員各位から廣く一般へ御宣傳下さるようお願い致します。

定價 二三〇圓
(會員割引 二〇〇圓)

昭和廿八年一月廿五日發行

東京 都千代田區
神田 駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會
法人 編集者 渡邊 公平

電話(白五二一五) 日本體育協會
神田(至五二一五) 振替口座東京四八二九番

東京都港區赤坂浦五番地
印刷所 株式會社 技報 堂

スキーと服装

スキー行に一番主要な役目を持つスキー靴は南獨得の技術 最高の材料で作つたものをお奨めします。

スポーツ用品

ミナミ TEL (25) 1353
田町 神小川 中

スキー材はスキー王國ノールウエーに於て製造された世界的有名品が入荷致しました。

オールヒツコリー
コンパイント

其他數種類
スケートはカナダ CCM
國產有名品豊富